

「皆が聖霊に満たされ」

使徒の働き 2 : 1 - 4

June.5.2022

使徒の働き 2 : 1 - 4 (パウロ)

Preface

私には、クリスチャンとされてからずっと持ち続けている夢のようなものがあります。

それは、イエス・キリストを信じる者たち皆が、聖霊に満たされることです。これ以上の夢は、今の私にはありません。

なので、今朝このように、聖霊なる神様が約束通り、主イエスを信じるキリスト者の上に臨んでくださったという歴史的事実について分かち合えることをうれしく思っています。

聖霊なる神様が来てくださったがために、私たちは神を知る者となりました。

聖霊なる神様が来てくださったがために、私たちは救いの確信を得ることが出来ました。

聖霊なる神様ゆえに、目には見えないけれども、目に見えるものよりもはるかに確実な霊的世界があることを知り喜ぶことが出来るようになりました。

聖霊なる神様が私たちの上に臨んでくださったために、私たちは、イエス・キリストを信じお仕えして行く生き方以上に魅力的な生き方はないという事を心から思えるようになりました。

そして、聖霊なる神様ゆえに、人間の愛、私の思う愛ではなく、キリストの愛で人を愛したいと思えるようになりました。

聖霊なる神様こそ、人を根底から変えることの出来る唯一のお方です。

ここ最近、自分自身のことを顧みた時、一つの癖があることを発見いたしました。

それは、「自分には正義がある、自分の思っていることやっていることは正しい」と思っている癖です。

ややもすると、自分の正しさばかりを思い巡らし、回想し、確信づけようとしてしまう癖です。

皆さんはどうでしょうか？ そういう癖がありますか？

イエス様に従っていた弟子たちにもそういう癖がありました。

ややもすると、誰が一番偉いのかとか、敵対する人に対して「天から火を下して焼き滅ぼしてしまいませんか」とか、自分には正義がある、自分が正しいと思う癖を持っていました。

そんな彼らを根底から覆した歴史的イベントが、2000年前の五旬節、ペンテコステの日に聖霊なる神様が弟子たちの上に臨まれたというイベントです。

Part One

旧約時代、イスラエルの民たちが荒野を過ぎて、ヨルダン川を渡り、乳と蜜の流れるカナンの地に入った時、それまでの遊牧生活から取って代わって、地を耕す農業を始めました。

そして、初めての穀物の収穫を束にして、神様の祭壇の前に持って出て来て、その束を揺り動かしながら主なる神様に献げました。

その日から数えて50日が経ちますと、大収穫の日が訪れます。

その時には、本格的に収穫物を収穫し、穀物のみならず、ブドウやいちじくやざくろやオリーブ等色々な農産物を収穫し、献げました。

正にこの50日目の時こそ、五旬節・ペンテコステの日であり、大収穫の季節がやってきたことを祝い、記念し、神に感謝する日です。

この五旬節の時に、聖霊が臨んだということはとても意味深いことです。

私たちの主イエス様がこの地に来られ、十字架に架かれ、肉を裂き、血を流し、人類の救いのために死なれ、葬られてから3日後に復活されました。

正にイエス様は、人として生まれ死んだ後生き返った、初めての収穫、初穂となりました。

つまり、主イエス様自ら、主なる神様の前に出て行き、初の収穫物として自らを神様にいけにえとして献げなされたわけです。

そのイエス様の復活した日から50日目に、ペンテコステ・五旬節の日がやって来ました。

そして、マルコの福音書を書いたマルコの実家に120人程の人々が集まり、心を一つにして熱心に祈っていましたが、突然、天から激しい風と共に、炎のような舌が現れて、一人ひとりの上に臨み、皆が聖霊に満たされ、聖霊が語らせるままに異なる色々な言葉で話し始めたところ、イエス・キリストを信じる者たちが次々と興されていき、この時から、無数の数えきれないほどの魂の大収穫が始まっていました。

旧約聖書の農産物の大収穫を主なる神様に献げるという礼拝行為が、新約聖書の時代に入り、聖霊がキリストを信じる者たちの上に降臨し、その彼らの語る言葉を聞いて無数の魂が救われていく人の大収穫が起こるということの予型・予表であったことが、ここで明らかになります。

そして、このペンテコステの日に臨んでくださった聖霊なる神様の特徴を一

一つ一つ見ていきますと、そこに深い意味や意義があることに気付かされます。

Part Two

まず、聖霊は、激しい風を伴って臨んでくださいました。

マルコの実家に120名を超えるイエス・キリストを信じる者たちが集まり、10日間一つ心にして祈っていると、約束の聖霊が突風のように臨み、その家全体を激しい風で満たしました。

風とは、強い空気の移動であり、重いものを吹き飛ばし、新しいものを運んできます。

空気中のすべての汚れを巻き込みながら吹き飛ばした台風一過の青空ほど、きれいな空はないでしょう。

たまに市役所などで、「光化学スモッグ注意報発令中」などの文字が掲げられることがあります。汚れた空気ゆえに目が痛くなり、息が苦しくなっても、風が吹けば、新鮮な空気が流れ満ちてきます。

聖霊降臨の際吹いてきた風は、古くなり、廃れ、汚れたものを吹き飛ばし、新しいものを運んできたことを象徴しています。

さらに、この聖霊の風はこの世界で吹いている風ではなく、天から吹き下りてきた風です。

人間が作り出すことの出来る風でもなく、自然現象による風でもありません。

聖霊の風は、天の御座に座しておられる父なる神とその右におられる主イエス様がお送りくださった聖なる風であり、その風が、キリストを信じる者たちに臨みました。

この風を伴った聖霊の働きは、神様の偉大な力がこの地に臨んだことを表わし、新しい歴史の扉を開いてくださったということです。

では、どういう新しさなのか？

私たちの中にある腐っている、崩れ落ちていつている世俗を吹き飛ばし、天の御国の活力、活気、生氣というそれまで体験したことのない大規模な霊的刷新という新しい扉を開いてくださいました。

イエス・キリストが十字架上で肉を裂き、血を流し、死なれたことをもって罪を取り除き、憎しみを取り除き、恐れや心配を取り除き、死を取り除くその偉大な力が、聖霊の風に乗って弟子たちの中に、私たちの中に臨むのです。

使徒の働き1：8で、

しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。

使徒の働き1：8（パワポ）

と約束した通りのことが起こりました。

私たち個々人一人ひとりの中に、家庭に、社会に臨んでくださり、私たち一人ひとりを、家庭を、社会を、世界を天の御国に変える偉大な働きを起こすのが、風を伴って臨んでくださった聖霊のお働きです。

イエス・キリストの十字架の贖いによる命こそまことの命であるという生氣をもって、私たちの暮らし、人生のすべてを変えるためにいらしたのが、聖霊です。

聖霊によって、個人が変えられ、家庭が変えられ、社会が変えられ、世界に大きな変革がもたらされるのです。

一介の漁師が、取税人が、特定の政党を信奉していた人が、世間一般の庶民たちが、聖霊が臨むと瞬く間に変えられていきました。

そして、エルサレム、ユダヤ、サマリア、ヨーロッパ全土、さらに地の果てまで変えていきました。

今、全世界にどこに行っても、まことの神を信じる、なんとかして神に人に仕えていきたいと祈り願っているクリスチャンがいない国はありません。

私たちの心の内に、霊のうちに、神の国が、天の御国が、イエス・キリストの十字架の愛と救いという永遠に新しい賜物を私たちのうちに据え付けるために、古き悪しきものを吹き飛ばす風と共に臨まれた聖霊の業の始まりがペンテコステです。

人は、聖霊なくして、人が真に人らしくなることもなければ、癒しも起こらなければ、祝福もなければ、永遠のいのちが与えられることもありません。

2節には、聖霊の風が「家全体に響き渡った」、聖書の欄外を見ますと、「家全体を満たした」とありますが、聖霊は、全人格を、全存在を満たすお方であり、私たちの一部分だけに臨まれるということはありません。

私たちの霊を満たし、心を満たし、体を満たし、考えを満たし、家庭を満たし、社会を、国家を、世界を、やがて全領域を満たすお方が聖霊です。

聖霊こそ、大きなまことの変革をもたらす神です。しかし、

ヨハネの福音書 14 : 17 (パウロ)

この世は、聖霊に敵対します。

だから、聖霊を見ることも、知ることもなく、受け入れることも出来ません。

しかし、主イエスを愛する者たちは、聖霊を知っています。

だから、聖霊の満たしを求め祈るのです。

人は人の言葉だけで変わることはありませんし、他者を自分よりも優れた者

と思うようにもなりませんし、主イエスのために命を懸けるようにもなりません。

カルバリ山の十字架の福音は、必ずや聖霊の満たしを通してのみ一人ひとりを根底から変える力となります。

また、家全体を満たした聖霊の風が私たち一人ひとりを満たすことによってのみ、この地を変える霊的刷新が起こります。

いつの時代も、またどんなとこにあっても、今私たちが求めるべき祈りは、聖霊の満たしです。

Part Three

そして聖霊は、炎のような舌となって現れ、皆の上にとどまりました。

使徒2：3で「炎のような」とありますが、ここで言う炎は何を意味しているのでしょうか？

炎は、暗闇を明るくします。

火が灯ると、暗闇が消え去ります。

つまり、炎となって現れなされた聖霊は、私たちの暗闇を照らし、闇を一掃するために来られたのです。

生まれながらの自然な人間は、罪悪と罪の真つ暗な暗闇の中で、どこから来て、なぜ生き、どこへ向かっているのか分かりません。

世俗に酔い、何を着ようか、何を食べようか、何を飲もうかばかり考え、この世の富貴栄華だけのことを考えます。

そして、明日が分からないことを恐れながら生きています。

至る所、明日は真つ暗な死しかありません。

死んだら終わりだなんてことは、嘘っぱちです。

キリストを信じずに死んだ先にあるのは、永遠の暗闇だと聖書は教えてくれます。

そのような人間の抱える現実の中に、聖霊なる神様は来てくださって、私たちの心を、霊を炎をもって明るく照らしてくださいました。

私たちがどこから来て、何のために生き、どこへ行くのかをはっきりと、キリスト・イエスのうちに照らし出してくださいました。

だから、聖霊を知る者たちの目は輝いています。

イエス様が「からだの明かりは目です」と仰った通り、聖霊を知る者たちの目は輝いています。

何だかよく分からないために濁ってしまっている目に、輝きを灯してくださいます。

さらに、火として来られた聖霊は、私たちを暖かく温めてくださいます。

どんな寒さの中にも、決して取り去ることの出来ない魂の温かさを下さ

います。

この世を少し生きてみますと、私たちすぐに気付きます。

世の中意外に世知辛く、冷たく、情けがなく、またたとえどんなに情けを受け、優しさを感じても、そのすべてが一過性で、また渴きを覚えます。

どんな優しさでも、一抹の冷たさが残る完全な情けではないために、また渴きます。

でも、聖霊が私たちのうちに来て満たしてくださいますと、その火をもって私たちの心を溶かし、祈る心を与え、その祈りを通して心が温かくなり、情が湧き上がり、主の愛を知り、主の愛を求め、求めたところ頂いた愛を隣人に分かち合うよう造り変えてくださいます。

なぜだかいつも、どこか冷ややかさの残る冷たい私たちの心を、温め、熱くしてくださるのが炎として来られた聖霊のお働きです。

あわせて火は、動力の根源です。

聖霊が私たちに臨みますと、私たちの心に力が溢れ、祈りと御言葉を求め、キリストを宣べ伝える証人として生きたいという力が現れ、信仰の力が湧き上がってきます。

さらに、火は、すべてのものを燃やし尽くし、すべてを溶かし、新しいものを作り上げる象徴でもあります。

火は、変化と創造の源泉です。

聖霊の火が望むと、私たちは変化を経験します。

新しい人へと造りかえられるのです。

コリント人への手紙第二 5 : 17 (パウロ)

これこそ、聖霊のわざです。

この聖霊の火が、五旬節の日に、一人ひとりの上に臨みました。

一人ひとりの下ではありません。 上にです。

聖霊は、何かの力、気、スターウォーズのフォースではありません。

品性、感情、心、意志をお持ちの神であられ、風が自由自在に吹くように、聖霊なる神様も、自由自在にご自分の御旨に従って究極的な益を成すために働かれる全知全能な神です。

なので当然、私たちの道具として、使用人として、しもべとして用いられるお方ではありません。

なのに、聖霊をあたかも道具のように、使用人のように、しもべのように用いようとしてしまうのが私たちでもあります。

よく私たち「賜物を用いる」というような表現を使いますが、聖霊なる神様によって与えられたすべての賜物は、私たちの上にあるもので、私たちの下にあるものではありません。

神より与えられし賜物は、聖霊なる神様が私たちをご自分の御旨に従って用いるためにあるのであって、私たちが私たちのためにだけ用いるのが賜物ではありません。

私たちの賜物の所有権が神にあることを気付かせてくださるのも、聖霊のお働きです。

聖霊は、私たちの上にとどまり、教え、治め、私たちよりもはるか先を見据えて導くためにいらしてくださった神です。

だから、私たちに出来ることは、この聖霊を認め、歓迎し、仕え、信頼することです。

そして、私たちの心を占有していただき、治めていただき、教えていただき、導いていただくことを願って祈るだけです。

イエス様は、聖霊なる神様を助け主と仰いましたが、父なる神様からキリストの霊として、私たちを助けるために送ってくださったお方です。

だから、聖霊を受けた者たちは、もうこれ以上孤独な存在ではありません。

人は一様に孤独を感じますが、孤独な存在として孤独を感じるのと、聖霊により神と繋がり、孤独な存在ではない存在として孤独を感じることは、全然違います。

もちろん、孤独には痛みが伴うことがありますが、助け主が共におられることを知っているならば、その孤独にも道が開けるといふ事を待つことが出来ます。

風が私たちのすぐ側にあり、内にあるように、聖霊なる神様は、私たちと共にいて下さり、私たちの中にいてくださりながら、私たちを助けようと待っていてくださいます。

聖霊は、キリストの霊として知恵を下さり、悟りを下さり、霊的洞察力を下さり、知識を下さり、才能をくださり、私たちに人生を生き抜くカウンセリングを下さり、まことの神を、御霊と真理によって礼拝出来るように助けてくださいます。

Part Four

また、聖霊は舌を伴って現れ、舌を伴って現れなされた聖霊に満たされた人々全員が、外国語を含めた異なる色々な言葉で、聖霊が語らせるままに話し始めました。

使徒 2 : 4 に、「他国のいろいろなことばで話し始めた」とありますが、この「他国のいろいろなことば」と訳されているギリシャ語は、第一コリントなどの他の聖書では、「異言」と訳されている言葉と同じです。

英語では、「話す舌」、「Speaking Tongue」と訳されています。

つまり、聖書の欄外を見ますと、「異なるいろいろなことば」と訳されていますが、所謂人間の言葉ではない、使徒パウロの言う天使の異言や神のみがお分かりになる天の御国の言葉なども含まれていたと考えられます。

いずれにせよ、聖霊がその人の上にとどまると、言葉が変わります。

ヤコブの手紙を見ますと、言葉を発するこの小さな舌が私たちのすべてを牛耳っていることを明らかにしています。

ヤコブの手紙 3 : 4 - 10 (パワポ)

人の舌ほど怖いものはありません。

人を殺すのに、武器はいりません。 投げかける一つの言葉で十分です。

この小さな舌が、私たちのからだを支配し、この小さな舌に私たちがどんな人間で、どんな性格で、どんなところを生きてきたのか、生きているのかがすべて表れます。

舌が発する言葉で人を生かし、人を殺し、人を動かし、歴史を動かし、物を作り、至っては神の言葉によってこの世界は造られました。

そんな神のかたちに造られた私たち人間が罪を犯して現れた様々な症状のうちの一つが、私たちの言葉がのろわれたということです。

創世記のアダムが、神様に犯した罪の責任を追及された時、「この女が悪いのです」と、さっきまでラブソングを捧げていた妻をのろい、その妻エバは、「この蛇が悪いのです」と神がお造りになった被造物を言葉をもってののしりました。

そんなのろいに満ちた舌を持つようになった私たち人間に、聖霊が炎の舌を持って臨まれた時、言葉が変わりました。

イエス・キリストの愛を、救いを、人を生かす言葉を、愛の言葉を口にし、それまで語ったこともない福音を語り始め、その言葉を聞いた者たちが、キリストの愛に魂を打たれ、神を信じる者へと変えられていきました。

否定的な言葉をもって人を責め立て、裁き、自分の正しさばかりを主張する言葉を発する者から、肯定的な言葉をもって人を立て、守り、自分の間違いを恐れず、正直に遜って告白する言葉を発する者へと変えられていきました。

Part Five

聖霊が臨んだとき言葉が変わったという事を考えますと、私自身聖霊に触れ

られてキリストを信じる者へと変えられた時のことを思い出します。

大学生活に挫折をして、大学3年生の頃大学を休学して行ったアメリカでイエス様に会おうわけですが、イエス様を信じる者と変えられますと、何だか無性に日本にいる両親に感謝の気持ちを伝えたくくなりました。

それまで、一度も両親に感謝の気持ちを伝えたいなんてことを考えたことも、思ったこともなかったのですが、無性に伝えたくなくて葉書を買に行き、サインペンの大きな字で「これまで育ててくれて、ありがとうございます。愛しています」みたいなこそばゆいことを書いて、日本の両親に送ったことがありました。

父も母も妹も、びっくりです。

今思いますと、聖霊が臨むと言言葉が変わるという事をそのような形で体験させていただいたなあと思います。

また、初めてキリストの福音を聞いた原語は英語で、イエス様を信じる時に聞いた聖書の言葉も英語でした。

そして、2番目に福音を聞いた原語は韓国語でした。

日本語で福音を聞くのは、日本に帰って来てから土浦めぐみ教会が初めてでした。

以前、大学を卒業した後進む神学校は、日本の神学校ではなく、海外の神学校に進みたかったという話をしたと思いますが、なぜ日本の神学校に行きたくなかったかと言いますと、その理由のうちの 하나가日本語でキリストの福音について学びたくなかったからなんです。

私にとっての日本語は、「この野郎、馬鹿野郎、こん畜生、ぶっ殺すぞ」とかいうエログロな自分を形成してきた原語であって、そのような言葉で神学を学びたくはないと思ったのです。

なので当初は、「日本語で福音を語る道には進みたくない」と思っていました。が、これまた不思議なことに、聖霊なる神様は私の上にとどまり続けて下さり、私の日本語に対する思いを変え、日本語で祈り、日本語で聖書を読み、日本語で福音を語り、日本語で聖書を語るところへとお導きくださり、まさに、私の言葉を変えてくださいました。

今は、当然ながら、どの言語よりも日本語で福音を語ることが、七転八倒しながらも一番の喜びです。

さらに、聖霊の満たしによって、キリストが神であられ、救い主であられ、すべてであられ、この方に従って生きていくことにのみ命があるんだということを、二度と否定なんか出来ない事実として心に刻まれた時、ある青年会のキャンプで所謂異言を与えられました。

日本語でも、韓国語でも、英語でも、どの国の言葉でもない異言が口をついて出て来て、その言葉で祈り始めました。

自分でも何を言っているのかよく分かりません。 ただただ、神のご臨在を体中いっぱいを感じるだけです。

見なきゃ信じない、触らなきゃ信じない、実際に体験し感じなければ信じることの出来ない頑なな私の心を神様はよくご存じで、異言が口を突いて出てくるという摩訶不思議な信仰体験をお与えくださいました。

第一コリント 14 章で、使徒パウロが、「私には、あなたがたの誰よりも多くの異言で祈り語っていることを、神に感謝しています。 異言で祈り語る人は、自らを成長させます。 だから、異言で祈り語ることを禁じてはなりません」と言っています通り、

もし、異言という賜物が皆さんの中に与えられている方がいらっしゃるならば、神のとの関係を深め、信仰が成長していくように大いに用いてください。

ただしそこに、他者を思いやる愛と秩序が無いならば、これまたパウロ先生が言うように、騒がしいどらやシンバルでしかありません。

そこに愛がないならば無に等しく、何の意味もなく、何の役にも立たないということを肝に命じながら異言を用いてください。

私は聖書が語っている通り、異言を禁じたり、否定したりは致しません。

ただし、やはり、ここで最も大事なものは愛です。

聖霊は炎の舌をもって、私たちの上に臨んでくださったのは、堪能な外国語の能力を与えるためとか、摩訶不思議な異言を与えて、自己満足や自己陶醉や自画自賛をさせるためではなく、愛の言葉を語り、キリストの愛を表すためです。

どんな言葉であっても、聖霊が私たちの上にとどまってくださると、私たちの言葉が変わります。

聖霊を受けた人と受けていない人とは、言葉が違います。

聖霊は、私たちに真理を語らせるようにし、愛と希望を話すように導き、神を信頼し人を愛する肯定的な言葉を口にするようになり、主イエス様の義と和解と癒しと恵みと永遠のいのちと救いを宣べ伝えるようにし、聖霊が喜ばれる言葉が私たちのうちに満ち、私たちの生活、家庭、社会や組織に、神の言葉を満たそうとされます。

聖霊は、私たち日本社会がまだ見ぬ、聖霊なる神様のご臨在豊かな世界をお造りになろうと、今もキリストを愛す者たちの上にとどまり、働いていてくださいます。

Conclusion

ペンテコステの日に、聖霊が炎のような舌をもって現れなさる前までは、聖書はヘブル語やアラム語で書かれたイスラエル人だけが読むことが出来、それ以外の民族・人種と聖書は、何の関係も持つことが出来ませんでした。

しかし、ペンテコステの日に聖霊が炎の舌と共に現れなさってからは、イエス・キリストの十字架の罪の赦しが全人類のためであるということが、それぞれの民族の言葉で語られるようになり、書き写されるようになり、聞けるようになり、信じる事が出来るようになりました。

それゆえに、ペンテコステ以降は、聖書の語る神こそ、すべての民族の神であられ、イエス・キリストが全人類の救い主であられるという事を伝え、分け隔てなく信仰と希望と愛を世界中の人々にお与えになる神のお働きが始まりました。正に、世界宣教の始まりを告げた魂の大収穫の宣言日が、ペンテコステです。

私たちは、神を知識だけで信じることは出来ません。

また、私たちの意志と形式だけで信仰生活を送ることも出来ません。

そして、私たちの計画と考えで、家庭や社会や世界を変えることも出来ません。

私たちの人生を、運命を、命を根底からひっくり返すためには、巨大な力、変化が必要不可欠ですが、

それを、激しい風と共に、炎と共に、炎のような舌と共に臨み、聖なる偉大な力を満たしてくださったお方が、聖霊なる神です。

聖霊が私たちの上に臨む時、私たちは力を受けます。

その力のみが、私たちを根底から変えることが出来ます。

聖霊による霊的刷新のみが、真に新しいものです。

お祈りいたします。

祝祷：使徒の働き 1 : 8 a